

指標名: 母乳育児を希望する褥婦の1ヶ月健診時母乳栄養率

背景

- ①母乳は児にとってもっとも適した栄養
- ②母乳栄養がトラブルなく出来る場合、育児にかかる負担感が軽減される。
- ③母子関係が円滑におこなえる。
- ④妊娠中から、「母乳で育てたい」と思う割合が、93.4%¹⁾に達していることから、母乳育児をスムーズに行うことのできる環境(支援)を提供する事が重要である。
- ⑤病院を退院してからの専門的で継続的な支援が求められており、1ヶ月健診での母乳栄養率を見ることにより、退院後の母乳外来、ママとベビーの学級、地域開業助産院との連携したケアの質が分かる。
- ⑥母乳育児成功のための10ヶ条を実践する事で、母乳育児成功となりえる。

データの定義

定義(分子)

分母と同じ対象者で、1ヶ月健診時点で母乳栄養のみ(1ヶ月健診当日と前日にミルク補足をしていない)の褥婦の数。

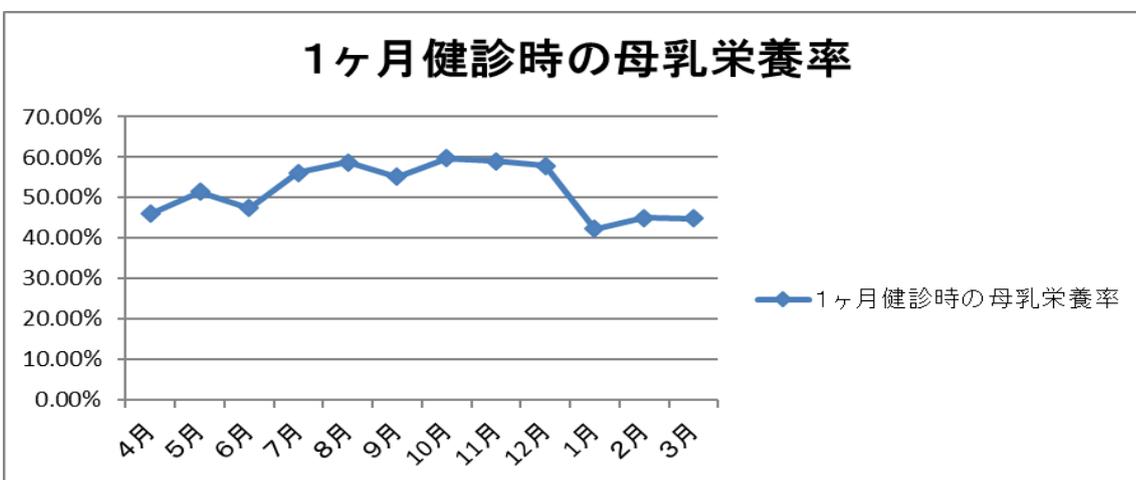
対象(分母)

産科扱い(入院管理の必要でなく、多胎ではない)児が、分娩室より帰室後から母子同室をおこなう環境(MFICU入院ではない)にあった2500g以上の病診連携ではない褥婦数。

かつ、完全母乳希望もしくはできる限り母乳希望と考える褥婦数。

2018年度のデータ

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1ヶ月健診時の母乳栄養率	46.05%	51.39%	47.50%	56.10%	58.73%	55.13%	59.78%	58.97%	57.81%	42.25%	45.07%	44.83%
分母: 完全母乳もしくは出来る限り母乳希望と考える褥婦	76	72	80	82	63	78	92	78	64	71	71	58
分子: 分母と同じ対象で1ヶ月健診時点で母乳栄養のみの褥婦	35	37	38	46	37	43	55	46	37	30	32	26



参考データ

・過去NI平均値 2017年度51.97 2016年53.54% 2015年55.34%、2014年52%

評価

母児同室を行う環境にあり2500g以上の病診連携でない褥婦のうち、完全母乳もしくはできる限り母乳栄養希望した者は80.9%を占めた。そのうち、1ヶ月健診時点で母乳栄養のみの褥婦は52.2%であった。どの年代においても母乳栄養を希望する者が多いが、1ヶ月健診時で母乳栄養であった褥婦の割合は20代が57%、30代が47%、40代が26%と年齢の上昇に伴い減少し、混合授乳となる褥婦の割合は上昇した。

今年度は、36週での保健指導の変更や、乳頭、乳房トラブルがある場合の母乳外来受診、もしくは、地域の助産院の情報提供といった退院後の継続的な支援、母乳育児に対する若手助産師に対する勉強会などを行ったことにより、昨年度より1ヶ月健診時の母乳栄養率が維持することができたと考えられる。母乳栄養の利点や、母乳栄養を希望する者の割合が8割を占めることをふまえると、今後も母乳栄養を望む褥婦の母乳栄養率の上昇にむけて、妊婦健診時での指導強化や分娩後の母体の状況や要求に応じた指導など、妊娠中から産後までの更なる環境調整が必要である。今年度のデータを共有し、母乳率の上昇を図ることを次年度も目標とする。ただ、今年度は「できる限り母乳栄養」という定義が曖昧な表現であり、妊娠中に対象が1日の中でどの程度のミルク補足を想定していたのか、混合授乳との違いを見極めるのが難しく、対象が望んでいた育児となっていたのか評価が困難であった。そのため、混合授乳とできる限り母乳栄養希望の区分けについて再検討が必要である。

参考文献

- 1) 厚生労働省:平成27年度 乳幼児栄養調査